

レイモン・デュシャン=ヴィヨンの作品における身体像の展開と機械のイメージ、
1913年-1918年

松井 裕美 名古屋大学

本発表の目的は、20世紀のキュビズム運動に密接に関っていた彫刻家レイモン・デュシャン=ヴィヨンの、1913年から1918年に制作された彫刻作品に関連する素描を分析することで、この彫刻家の身体像における機械的な表現の位置付けを問うことである。レイモン・デュシャン=ヴィヨンは、大学で医学をおさめたのち、1899年頃から独学で彫刻を始め、1918年に没するまでに、幾何学的な形態を特徴とする様式を確立した。デュシャン=ヴィヨンは彫刻作品を制作するにあたって多数の素描を残しているが、未刊行のものを多く含んでおり、先行研究における年代推定も不十分である。本発表では、ポンピドゥー・センター、ルーアン美術館およびフィラデルフィア美術館に所蔵されていた未刊行資料を多数ふくむ素描作品、手稿の徹底した研究調査の成果に基づきながら、デュシャン=ヴィヨンの作品における身体像の問題に関する新資料および新知見を示す。

1913年以降にデュシャン=ヴィヨンが制作した彫刻作品のための素描には、有機的な表現と無機的な表現を繰り返し行き来するなかで、身体イメージを展開させていく特徴が認められる。《恋人たち》(1913年)や《すわる女》(1914年)の素描における、身体像を幾何学に還元しながらも、肉体の躍動を表現する試みに並行して、1910年から1914年には、《偉大なる馬》(1914年)へと繋がるような、一連の機械的な馬のデッサンや石膏習作が制作されるようになる。さらに、1912年以降、微生物と機械の部品とを組み合わせたような形態の装飾デッサンが登場しはじめる。このような素描が、機械に生命の躍動と美を見出すデュシャン=ヴィヨンの思考の表れであることは、彼の執筆した論考「建築と鉄」からも明らかである。

ただし、彼の別の手稿を読み解くと、必ずしも身体を機械化することに肯定的なばかりではなかったことが理解される。また、最晩年に執筆された演劇『レ・セマフォール』(1918年)は、負傷兵が身体補助の機械を装着したことが招く皮肉な末路を描いたものであった。後者は1915年9月より衛生兵として前線に参加したデュシャン=ヴィヨン自身の体験を反映させたものであり、芸術家の戦争体験が身体像に与えた影響を考察するうえで、非常に重要な資料となる。

本発表の前半では、彫刻のための素描を中心に分析することで、完成作の背景に存在していた、機械と生物のイメージのあいだを行き来するデュシャン=ヴィヨンの創造性を明らかにする。後半では、彼の手稿及び出版物における「無意識」、「躍動」、「生命」、「機械」といった概念への言及に着目しながら、第一部で問題にした身体表象に関する創造性に、どのような意味づけを行うことができるのかを考察する。

(まつい・ひろみ)